Title	二つのロシア ： 帝国・宗教・ネーション（共同研究報告 ： グローバリゼーション研究）
Author(s)	松本，周
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9 : 18-19
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4779
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

共同研究報告

【グローバリゼーション研究】
二つのロシア
― 帝国・宗教・ネーション ―

本年度第３回「グローバリゼーション研究」研究会は６月９日、法政大学教授・下斗米伸夫氏を発表者にお迎えして開催された。概要は以下の通りである。

今回の発表はロシア分析・研究にあたって、新たな宗教的視点を提供するものであった。従前の無神論国家対ロシア正教という通説的な対比とは異なり、正教会から異端と看做された「古儀式派」の地下水脈的な動向に焦点をあてた発表であった。

古儀式派を理解するためには、1666年のニコン改革における正教会の分裂にまで遡らなければならない。この際にギリシャ式典礼（特徴的には三本指で十字を切る）を受容した主流派に対し、自派の伝統的典礼様式すなわち「古儀式」に固着したために異端とされたのが古儀式派である。非主流派ではあったが、少なくとも全体の1/3が古儀式派であったとの説もあり、一大勢力であったことが窺われる。そしてロシア史理解のうえで注目される古儀式派の主張は、サンクトペテルブルク（帝政ロシアの首都）をアンチ・キリストの街として忌み嫌うこと。逆にモスクワを第三のローマとして重要視するという都市観である。

異端宣告され、歴史の表舞台から姿を消した古儀式派が、その後に重要な歴史的役割を果たしたと見られるのが、革命による帝政崩壊そしてソビエト連邦成立期である。２月革命時の要人の中に

古儀式派の系譜に連なる人物が見出されること、またモロゾフら新興ブルジョアジー階級と古儀式派の関連が見出されることなどが説明された。さらに、彼らが資本を蓄積し、工場での高生産性を実現していたことから、マックス・ヴェーバーのいう「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」との類似性についても言及された。

またソ連成立期のモスクワ遷都にも古儀式派勢力の意向が推察されるのではないかと説明された。ただしレーニンは結局、初期の支持勢力獲得のために古儀式派を利用したのであり、その後は宗教離れが加速したと観察される。なお、その後から現代までの歴史展開として、特にソ連崩壊を受け、こうしたロシアの歴史古層としての古儀式派水脈が現代再び、注目されると結ばれた。

質疑応答においては、興味深い内容を多く含んだ発表についての評価とともに、歴史学的な実証可能性について議論がなされた。特に社会的「敗者」側の集団だけに史料収集の困難さのあることが語られた。また資本主義との関連については、古儀式派の社会倫理が明示されているわけでなく、無数の分派において多様であり得ること。また東方教会と西方教会の大きな相違から考えて、少数の歴史エピソードから古儀式派とプロテスタントの類似性を述べることの妥当性についても指摘された。以上のような点をめぐり、活発な討論が交わされた。

（文責：松本周　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科 博士後期課程）

（2008年6月9日、聖学院本部新館2階）